

GKS

ピーター・J・テイラー*
(池口 明子** 訳)

Peter J. TAYLOR
GKS.

Political Geography Quarterly, Vol.9, No.3, 1990, pp.211-212.

イギリス社会科学の週刊誌, ニュー・ソサイエティーは, その終刊直前にある短文を掲載した。それは地理学を「サッチャーイギリス」の「学問的帝国主義」として描写する内容であった。新しい社会科学が作り出されている, と著者は言い, それは「ポスト福祉主義, ネオリベラリズム, 新右翼, そして新しい地理学の侵入をとまなっている」と言う (A.Caudrey, *Winds of change*, *New Society*, 29 April 1988)。そう, また1つの新しい地理学が我々の歴史的コレクションに追加されたというわけである。そしてこの地理学も, マッキンダーがかつて述べた帝国主義時代の「新しい地理学」と同様に, ある時代のポリティカルな事情を背景にしているようだ。こうしたわけで, 地理学がイギリス政府の教育プログラムの中心に, 政治学・経済学・社会学を押しつけて地位を獲得しているのも不思議ではない。

この最近の「新しい地理学」とは何か? イギリスの教育計画という意味では, 中心カリキュラムにおける地理学の内容に関する初期の案をめぐる論争のなかにその明確なヒントがある。すなわち, 地理学は第1に, 「事実」を扱う学問である。したがって理論や抽象は削除され, 世界を記述することに回帰する。この状況は勿論, 高等教育に従事する我々にもなじみあるものになっている。GISの歓迎とともに

に事実とは地理学的課題の頂点に位置づけられつつある。

これまで「地理学の労働市場を独占するような新しい地理学」というものは存在し得なかった。いまや大西洋の両岸で, 講師や助教授公募の半数は地理情報システムの専門知識を要求している。我々のディシプリンにおける近年の学史に, この驚くべき技術主義な動向がどう位置づけられるのか, ここで検討してみよう。

実証主義地理学の大きいなる復讐

1970年代, 「計量革命」からの退却が顕著だった頃, デレク・グレゴリーはその有名な著書「*Ideology, Science and Human Geography* (Hutchinson, 1977)」のなかで, 計量学者を後期ビクトリア朝の人々になぞらえた。これは巧妙であり, また残酷な攻撃であった。巧妙なのは議題を哲学に向けた点であり, 残酷なのは地理学の近代論者を未来ではなく過去になぞらえた点である。19世紀実証主義の後継者として, 計量地理学者は, 彼ら自身が気づいていない不名誉な哲学的立場におかれたのである!

人文主義者が本当の人々とは何かを, ラディカル派が本当の構造とは何かを議論するなか, 1970年代の計量地理学者は守勢にあった。双方の批判は, 「空間分離主義」は位置というものの袋小路を脱して異なる道筋を開いたものの, 地理学にとっては適切な

* ニューキャッスル大学

** 名古屋大学・院

プログラムではない、という点で一致していた。つまり哲学的な領域においては、新しい革命は計量革命のナイーブな前提を打ち壊すものであった。しかしこの領域は論争に適したものだといえるだろうか？ 今になってわかるのは、計量学者がある大きな強みをもっていたことである。それは学問以外における彼らの生産物の潜在的効用である。計量学者が批判を逃れ、1980年に優勢にまわってGISを実現したのはこの実践的領域のうえであった。

1つの解釈はこうである。1960年代の初期計量学者は彼らのディシプリンの再生に関心があった。彼らは立地論に基づく新しい知識の創生者であった。ブライアン・ベリーは「地理行列」として、一方の軸に場所を置き、もう一方の軸に場所の描写をおいている。行と列は地誌と系統地理とをそれぞれ定義するように組み合わせることができる。現代的な用語でいうと、これらは「地理的知識システム (Geographical Knowledge System)」と呼ぶことができる。現在の計量学者が為したのは、このGKSをGISに変換したことである。知識から情報へと後退することにより、彼らは1970年代の批判を迂回した。「情報時代」への地理学からの貢献者として、彼らはもはや時代遅れのヴィクトリアンなどではないのだ！

知識から情報への後退は何を意味するのだろうか？ 知識とはアイデアにかかわるもの、すなわち、我々が学問と呼ぶ統合された思考体系のなかにアイデアを組み込むことにかかわるものである。情報とは事実にかかわるもの、ある状況の特定の特徴を切り出しそれを自動的な観察として記録することにかかわるものである。したがって、学問はそれが生産する知識によって定義されるのであって事実によって定義されるのではない。つまり、ある「地理的知識」と結びつかない「地理的事実」(例えば、クリケットの優勝決定戦がもはやダッカでは開かれないといったこと)は、単なる地方の地理 vernacular geography (「浅はかな探求」)にすぎない。実証主義者の復讐は、情報への後退であり、彼らの知識の問題そして敵対者をおきざりにすることだった。しかし、その結果が、最悪の類の実証主義、最もナイーブな経験主義への回帰となってきたのである。

反地理学的な実証主義

GISは地理学の一部による「ハイテク」改革であり、誇大なハイテク風土病に冒されている。新しい計量学者はセオドア・ロスザックがいうところの「情報の崇拜者」(Lutterworth, 1986)で構成されている。この崇拜者の主な特徴は、彼らが解決手段をもっている問題を探すのに、多大な時間を費やすことであろう。この技術先行型の精神性は、何か「空間的」なもの(つまりすべて)を研究しようという地理学の性癖と相まって、前述のニュー・ソサイエターが批判したような新しい地理学の帝国主義を生み出すのである。

GISは、空間的に定義された個々の事実の系統的な収集を、扱うための技術パッケージである。これらの事実とは例えば医学統計や、リモートセンシング画像、犯罪ファイル、土地利用データ、人口登録などである。このパッケージは、その情報が何であるかに関わらず、空間的なパターンを生産することができる。こうしたパターンを解釈する段階になって、GISの利用がもつ本質が明らかになる。もしも「新しい地理学」が、他の学問で解釈するためのパターンを提供するだけならば、それはプロセスからの乖離であり、いかなる地理的知識も生み出さない。そうした計量学者は、今週は犯罪を扱い来週は気管支炎を扱うといったような、根無し草的な地理学を生み出すだろう。このような活動が地理学の教室で起こる限り、それは「反地理学」的である。それは他の学問に役立ち、「学際的な研究」には良いかもしれないが、地理学を知的に不毛なものすなわちハイテクを利用した些末な探求にしてしまう。

だからこそ、我々は初期の計量学者が頭を悩ませた、パターンとプロセスに関する議論に立ち戻るのである。確かにある程度の根無し草は常に生まれるかもしれないが、現代の計量学者達は、先人がやったようにプロセスを置き去りにすることは望まないと私は信じる。GISはGKSと対立するものではなく、相互に必要とするものである。単純に言って、初期の技術への熱中がすぎれば、誰もパターンのみ知的キャリアを維持することはできない。さて、GISは我々のGKS、政治地理学にどのように役立つだろうか？